

# 東京家政学院 図書館報

平成15年3月5日 第49号

発行者 東京家政学院  
 大学附属図書館  
 〒194-0292 東京都  
 町田市相原町2600  
 電話 042(782)9815  
 印刷所 (株)高尾印刷

## 『デジタルホームレスと コミュニケーション』

田中清章

二十一世紀に入り、「パソコンや携帯電話が分からないから使わない、触れない」と公言するのは少々肩身が狭い切実な問題を抱えたコンピュータカルチャー時代である。

人やメールアドレスを持たない人のことを「情報難民」―「デジタルホームレス(反対語は「デジタルリッチ」)」と呼ばれる人々の出現である。

デジタルホームレスは、本質的には「食わず嫌い」で、パソコンが無くても困らない、という人が多く、恐れに似た感情を持ち、パソコンに使われる、という気持ちさえあるのかもしれない。

本学でも、入学するとすぐに全員にメールアドレスと暗証番号を配布することになっていて、否応なしにその対応に迫られる。また、図書館なども情報検索には欠かせないものとなっている。

パソコンとそれをつなぐ情報通信ネットワークの普及は、学生や教職員の生活や教育現場にも如実に表れている。バーチャル教育、バーチャルミュージアム、バーチャルショッピング、バーチャル銀行・・等といった事柄が自然発生的に出現し始め、我々の生活の諸側面に仮定の要素が取り込まれ

ることになり、当然、我々の教育分野にも出現していくこととなる。具体的には、教育現場では「校舎」というひとつの大きな屋根の下に集まって教育を受ける必要性が低下し、空間と時間を選ばない(教育)授業形態が可能となるのが考えられる。いわゆる遠隔授業である。本学でも、昨年度に筑波三番町・町田校舎間で遠隔授業の実験が行われている。

企業においても市街地にオフィスビルを構えることの必要性が問われ、働くことの流動化が進み始め、「テレワーク」「在宅勤務」、そして場所を選ばず喫茶店や電車中でも仕事ができるような大きなメリットがある。

言いかえれば、メリットとして「生活の規制緩和」、「固定した組織からアメーバ組織化への転換」である。満員電車での通学通勤の必要がなくなり、自宅やサテライトスクールでの受講が可能になる。しかし、始めのうちこそ、肉体的に楽に、ビジュアルに楽しく学んだとしてもだんだん飽きてくることは自然の摂理である。これがデジタルコミュニケーションだけでは解決できないデメリットで、人の人的コミュニケーションの欠落と情報過多・情報の押し付けにその要因があると考えられる。

### 第四十九号 目次

デジタルホームレスとコミュニケーション  
田中 清章

管理栄養士を社会に送って  
浜野 美代子

「旅と病の三千年史」  
早川 浩

創立八十周年記念誌の刊行について  
天野 恒男

昔を今に  
「日々の案内人」  
森 宏枝

大江文庫について  
図書館からのお知らせ  
図書館利用者アンケートについて

情報コンセント設置について  
寄贈著書紹介  
メールアドレスの思い出

資料の紹介  
「花木真写」  
古川 利温

西本 周子

従って、デジタルホームレスへの対応は、自助努力が必要不可欠であるし、あふれる情報の取捨選択の多角的能力の養成が望まれている。

(学生部長)

# 管理栄養士を社会に送って

浜野 美代子

このたびは、大変重いテーマをいただきましたが、まず本学の栄養士養成の歴史を少しご紹介させていただきます。

本学家政学部栄養士専攻が設けられたのが昭和三十九年度でした。昭和四十二年に管理栄養士養成施設として指定され、初代の栄養指導研究室の責任者となられた故桑原丙午先生のご苦労は大変なものでした。医者であり東京都

第一号の栄養士であった先生は、国民健康づくりの基礎は栄養であることを強く確信し、一生かけて栄養指導に尽力されるとともに、

栄養士の養成に努力されました。多くの著書や論文の執筆などによっても国民栄養の改善に貢献され

その数々の偉大な功績は栄養指導に携わる人々から今も深く称えられています。

先生は学問的に全く未開拓の分野であった栄養指導を今日の「栄養指導論」としての方向づけと基礎を築かれました。先生が退職されてから、後を引き継ぎ二十五年経過しました。先生の栄養士教育

には①プロフェッショナルな栄養

士を目指す。②地域に目を向ける。

③医学に接近しパラメディカルの一員となる。との理念がありこれを継承し時かれた種を育て、開花させるのが私の役目であると心得てはおりました。

しかし学ぶということは私にとっても学生にとっても大変難しいことでした。講義や決まった手順で実験実習をすると思ひ込み、三年次になって専門科目である栄養指導・実習が始まると大混乱が起きます。教育内容はさることながら学生が「一番興味のもつものは何か」それを知るため、図書館の利用を試みました。例えば、身体・病気・料理・栄養・子ども等各自が問題点を自覚し積極的に勉強し始めました。それから、栄養指導研究室での教育は「自分の身体を知る・食事記録の困難さを体験する」ことを基本とし、各自の身体構成・栄養摂取量等を評価することを二十五年間続けてきました。これが学生にとって時代背景を理解する上で貴重な資料となっています。

今日のようにパソコンのない時代、手計算でよく頑張ったものであると卒業生を心からほめて上げたい気持ちで一杯です。

教育環境が変わり多摩キャンパスに移ってからは三番町キャンパスでは出来なかつた実践教育を行うことができました。

多摩キャンパスに移った当時大勢は地域社会から孤立している状況でした。しかし学生の実習先である東京都町田市保健所の指導で出逢いが出来ました。

《地域医療における学習》

JR橋本駅に近い神奈川県相模原共同病院の当時の院長でした。先生から地域住民の健康・食生活の実態を知るには実際に健診に参加し勉強することが大事であるとの助言をいただきました。そして、保健所と病院が実施する健診の事後指導を神奈川県津久井郡四町で学生と参加させていただきました。当時健診の結果報告を地域によつては聞きにくる人も少なく指導に つなげられない状態の中、どう改善していったらいいのか模索中でした。早速、住民の日常生活に役立つ食事指導を導入する事を提案し、医師・看護師・保健師・

栄養士の研究会が出来ました。本学では「健診時における食事調査方法の検討」について責任を持つて研究・実施につなげることが出

来しました。その後高血圧教室、肥満教室の実施など、継続的な体験を積み、地域住民と一緒に健康づくりを展開することが出来るようになりました。当時の参加者一名は地域の病院で医療・介護の連携のもとに管理栄養士として大学を誇りに思つて頑張っています。

《高齢者の尊厳を守り、サービス精神を忘れない》

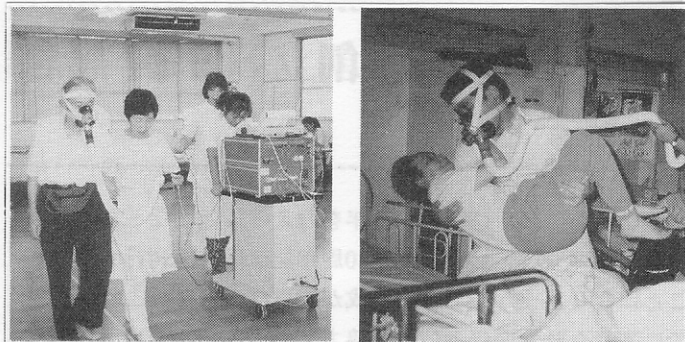
思えば社会福祉施設を学生と一緒に見学させていただいたのは十五年前のことでした。施設の利用者の状態をみると要介護度ではレベル3以上が七〇%以上、八六%の痴呆率、有病者は九五%、一般食を食べられる人は十五人に過ぎずほとんどの人はキザミ食・プレ

ビス食等でした。当時は、高齢者のケアの中に大切な栄養アセスメントが抜けており、ただ食事を提供すると考えられていました。そのころ多摩キャンパスでの卒業研究が始まり学生共々、高齢者について学ぶ機会が出来ました。その後「高齢者の栄養アセスメント」に取り組みたいとの相談を受けました。理事長始め、生涯を高齢者の医学と向き合つてこられた医師が在職されており、良き理解者として共に十数年をより良い食事処遇に向けて努力しました。その甲斐あつて利用者個々に適した食事の処遇が生まれ、他のケアチームとの情報交換やその中心となる施設の職員が、利用者一人一人に誇れ



地域での健診と食事指導





高齢者と介助者の身体活動量の測定

るサービスを提供できるように心がけるようになりました。その職員の一人に栄養課長として大学院の卒業生もおり、高齢者の幸せを心から願って働いています。

時代はすばやい変革を要求しており、平成十二年にスタートした介護保険制度において療養型医療施設・老人保健施設・老人福祉施設と統合され、同じ位置付けとして管理栄養士の活躍の場が確立されるようになりました。

《子どもの食教育の取り組み》  
保育所は家族を持って、親となりそれまでの生活とは一変した親

子が、右往左往の連続、戸惑い、悩みを抱えて最初に出会う社会です。

「次代を担う子ども達が丈夫に育つ」という大きな目標で地域ぐるみの「子どもの食を通じた健康づくりネットワーク」が構築されそこに本学卒業生が学校教育委員会から専門委員として勉強会に出席しております。

今回研究室での仕事の全貌を眺めてみますと、卒業生の就職先が広がり管理栄養士として社会的にも貢献が出来るようになりました。蒔いた種が生え地域環境を整えることのできる人材が育ってきております。

平成十二年の栄養士法の改正により社会から求められる管理栄養士の質は大きく変化しました。その社会の動向は卒業生には、向い風になることを覚悟し、日々勉強を積みかさねていただきたい。

それにはまず「国家試験に挑戦すること」を心から願っております。

最後に三十七年間、本学図書館を始め各関係方面から深いご理解と適切なご助言・ご指導いただきました。また、私を絶えずはげまして、惜しめない協力の手をさしのべて下さいました学生・助手に心から感謝いたします。

(家政学部教授)

## 本の周辺

### 旅と病の三千年史

旅行医学から見た世界地図 (濱田篤郎著・文春新書)

早川 浩

人は昔から旅をしてきたが、その旅の多くは苦難、ことに病苦との闘いの連続であった。また旅する人に伴って広まった病も多かった。本書はこのような旅と病とのつながりを、古くはアレキサンダー大王の大遠征から現代の観光ツアーにいたるまで、多くの興味ある史実を時空ともに壮大なスケールで俯瞰して、小さな新書判に圧縮した好著である。

著者は早くから旅行医学に着目してその必要性を提唱し、自らも現在実際に海外渡航者の診療にあたっての医師である。

本書はまずアレキサンダー大王、玄奘、マルコポーロ、イブンバツタ、天正遣欧使節などの古代から大航海時代にかけての旅行者が苦しんだ病について推理し、次に中世の世界を暗黒としたペストをはじめとする疫病が、旅行者とともに全世界に広がった恐怖を述べている。近代になると植民地への進出をきっかけとして、マラリアやコレラなどのさまざまな新しい感染症が問題となり、ここに著者のいう古典的旅行医学が成立する。19世紀の半ばから微生物学が興隆し各種の

病原体が発見されるが、同時に近代戦争が頻発して旅行医学はそれを支えるための軍陣医学として発展する。二つの世界大戦が終わってこれらの古典的旅行医学は終焉を迎えるが、平和の回復とともにビジネスや娯楽としての海外旅行が盛んになると、それに伴う新しい健康問題への対処が必要となり、現代旅行医学が誕生したのである。欧米に比べわが国ではこの領域に対する関心が乏しかったが、1970年代から経済成長に伴い海外進出が活発になるにつれてその必要性が認識されるようになった。その対象となる健康問題も伝統的な感染症のみならず、時差ボケ、高山病、さらには最近話題のいわゆるエコノミークラス症候群などその対象は広がり、近い将来には宇宙旅行についてもその分野に加わることが考えられる。

本書は新書判200ページあまりの小著であるが、旅行医学を軸として人間の歴史を健康の面から考察し平易に解説しており、ことに感染症については資料も豊富で専門的にも興味深く読むことができる。海外に出かける前に一読されれば極めて有益であろう。

(短期大学生生活科学科教授)

本学は、このたび創立80周年を迎えることになった。記念事業の一環として「創立80周年記念誌」を刊行することになり、ようやくその完成が間近になった。これまでに寄せられた関係各位のご協力に深く感謝する次第である。

この記念誌の刊行趣旨は、「創立80周年記念誌刊行小委員会」で次のようにまとめられた。それは、単なる歴史的事実・経過をたどるだけの記念誌とせず、過去から現在を踏まえ、将来の展望へとつなげる姿勢を織り込むことを意図したことである。既刊の「東京家政学院五十年史」に続く「80の春夏秋冬」として意義あるものにしたという願いがあった。

記念誌は、本学理事長、大学学長、筑波女子大学学長、中学・高等学校校長、光塩会会長、あづま会会長の「創立80周年のごあいさつ」に始まり、第1章「光と塩」、創立者「大江スミの熱い想い」へと続く。大江（家政学）の世界、大江スミの足跡、写真で見ると大江時代、寄稿先生を想う、大江語録などが内容である。先生から有形・無形の教えを受けた卒業生の寄稿は、改めて先生の偉大さに触れることができる。往時の様子を髣髴とさせる章である。

第2章「新しい世紀へ」—各部署のあゆみと現状—では、各部門が過去の流れをたどりながら、優れた教育を実践する現状を映し出し、将来展望につなげている。

さらに卒業生や現学生も登場し、そこに各部門の特色が表われている。

第3章「あゆみ 東京家政学院の80年」のなかでは、この80年を草創と伸展、復興と希望、未来への躍動の三つに分けてとらえている。創立から現在までが資料中心に展開されている。本学の長い歴史の足跡をたどることができる。写真も当時を物語るものである。また、現在各界で活躍中の卒業生が登場して、本学の優れた教育の側面をよく表出している。

第4章資料編は過去からの諸資料である。資料として記録された事実の背後には、それぞれ意味深い出来事が存在していたことを思わずにはいられない。

この記念誌刊行を機に本学全体のイメージを統一し、その向上を図るため、ロゴやマークを見直し、エンブレムを新たに作成することになった。「東京家政学院」のロゴ（規定文字）やバラのマークなどの統合化を図った。創立80周年のマークも併せて作成し、広く使用できるようにした。

学内で募集した百点余のエンブレムから、本学にふさわしいエンブレムが初めて決まった。本学のイメージアップに貢献するものと期待されている。

表紙デザインもきまり記念誌としての体裁が整った今、改めてご尽力を賜った方々に厚くお礼を申し上げる。

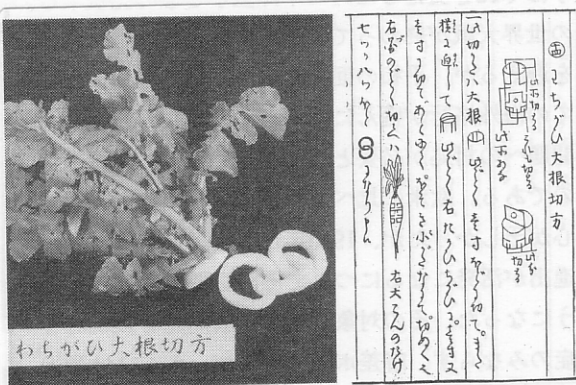
（附属図書館長）

昔を今に

江戸時代の天明期を中心に出版された料理書で、後に「百珍物」と呼ばれた材料別料理書がある。天明二年の「豆腐百珍」をきっかけに天明五年には「大根一式料理秘密箱」、諸国名産大根料理秘伝集、鳥と卵の料理、「万宝料理秘密箱」などが出版、以後鯛、飯、甘藷、柚、海鱈、蒟蒻などを材料として次々出版された。

これらの料理書を使った学生の研究がある。その中の「大根一式料理秘密箱」から再現されたものと評価・感想の一部を紹介する。

わらがひ大根切方



わらがひ大根切方

評価・感想

大根一本を切らずに、くりぬいて輪がつながっている状態にする切り方である。実習では、やりにくかったもので、葉を切り、大根もまるごと一本使わず、切って使った。当時は大根が豊富に出回っていたと実感した。

瞿麥花石竹花大根切方



瞿麥花石竹花大根切方

評価・感想

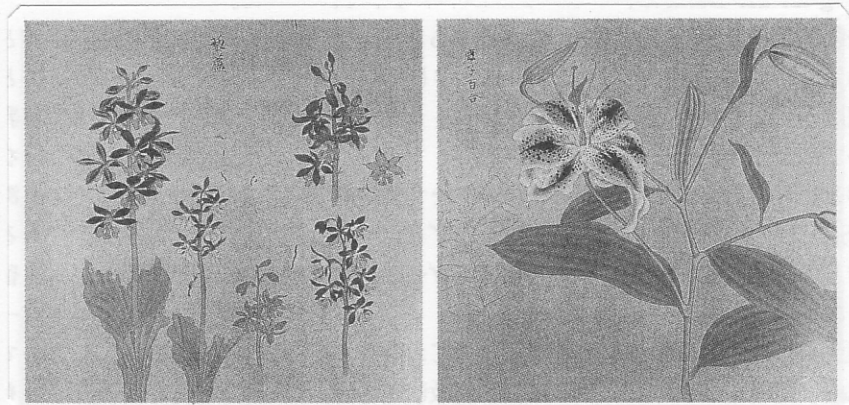
大根を花の形がくずれないように、また、薄く透けて見えるくらいに切るのが困難であった。実際に再現を行い、この細工物は、観賞用であったのではないかと考える。

家政学部家政学科卒業研究より  
生田 佳子、植木 洋子、  
増田 真祐美  
指導教授・江原 絢子



近衛豫楽院御画  
**花木真写**  
 陽明文庫蔵  
 解説・源豊宗 北村四郎

淡交社刊



身近にある動植物や未知の珍奇なもの姿を、真理探求の気概をもって構造的に把握し、あるがままに写生した絵画はわが国では18世紀後半からの約100年間に大量に制作された。朱子学の合理主義哲学を根底とした文化社会が、八代将軍吉宗の実学奨励、蘭学の興隆や中国写生画の摂取といった現象をもたらしたその成果である。

すでに江戸時代前期にも徐々にこの動きをみることができる。幕府お抱えの絵師狩野探幽の草木写生図、中国の本草学（博物学）をお手本とした薬用植物の分類とその写生図、園芸の流行にともなう園芸書の発刊などである。そして正確緻密な写生図という点で時代を先取りしたともいえる『花木真写』（陽明文庫蔵）が光彩を放っている。

『花木真写』（淡交社、1973年刊）は同名の写生図巻の全図を原色で収録した貴重な図録である。原本は三巻からなるが、当初は全部で123種類の花を唐紙に一種ずつ描きこんだ（おそらく数年かかったであろう）もので、のちに現在の巻物に仕立てられたのである。筆者の近衛家熙（1667～1736）は後水尾天皇を祖父とする高級貴族で太政大臣にまでのぼったが、59才で落飾し豫楽院真覚と称した。歌道はもとより書道、茶道、華道に秀で、また幼い頃から絵画にも習熟していた。その腕前の確かさが『花木真写』に示されているわけであるが、家熙の言行録『槐記』（著者は家熙の侍医山科道安）を読んで見ると、この写生図が長期に亘る学究的な探索の集大成であったことが分かる。

すなわち植物の種の同定に必要な要素が正

確に把握されているこの図を、家熙は手元に置いた和漢の本草学の書物を参考しつつ、実物の詳細な観察によってその構造を理解した上で描いたのである。また『槐記』には家熙のもとに六年間毎日花を届けている貴族の名が記されており、家熙の周辺に同好の士のあったことが知られるが、この他様々な方法で資料を得たのであろう。そして植物に関して不明のことが生じると、有名な本草学者松岡玄達にしばしば問い合わせをして問題の解決を図っている。そうした努力の結果『花木真写』の写生図は、それから約130年後の飯沼慾齋による『草木図説』の図の正確さに劣らないともいわれる内容を示すこととなったのである。

しかし『花木真写』の花の絵は、植物学的に正確かどうかはわからなくとも、私たちに深い感動を与えてくれる。各図は実物の直接の写生図ではなく、それらを浄写したものであるが、家熙は専門的な画家ではなかったから、線描や彩色に特別な工夫を凝らしたり、誇張や省略などの造型操作によって表現性を発揮しているわけではない。新しい資料が手に入った際の、見えるがままをきちんと記録しておきたいという強い意志が、結果的に花々の美しさを丹念に描出することに結実しており、いくら見ても飽きることはないのである。

なお陽明文庫には『花木真写』の図とまったく同一の構図と技法で描かれ、家熙印のある花の図が貼交ぜられた屏風が存在する。

（人文学部教授）

## マールブルグの思い出

古川利温

Marburg an der Lahnは、フランクフルトから車で、1時間余のところであり、ライン川の支流であるラーン川に沿った小さな美しい大学町で、私が留学していた1968年頃は人口2万余であった。

マールブルグ大学は、ハイデルブルグ大学、フライブルグ大学とならぶ古い大学で、マールブルグを含めたメルヘン街道地域の童話を集めて本を出版したグリム兄弟が学んだところである。近代では、ハイテッカーや三木清がいたことでも知られている。

町は領主城のある小高い丘を中心に広がっており、城からの眺めは素晴らしかった。この城は、宗教改革の時代にルッターやツウィングリー等が集まって会議をしたところである。市場広場 (Marktplatz) が城から丘を少し下がった所にあり、童話に出てくるような建物が集まって、独特の雰囲気を保っていた。(写真)

マールブルグ大学小児科は、町の中心にある聖エリザベート教会の前にあり、昔は教会関係の建物であったのを改装したものようであった。この教会はドイツ初のゴシック様式の教会で、貴族夫人であったエリザベートが貧者や病人に奉仕活動を続け、死後、聖人に列せられ、その墓の上に建てられたものである。小児科のLinneweh教授は日独医学友好に熱心な方で、日本国際医学協会の推薦によって私を招いてくださったのである。当時の小児科病棟の中庭には、日本国際医学協会から贈られた石灯籠と桜があり、夜にはライトアップされていた。

私にとってこの留学は、はじめての外国生活であり、全てが珍しく、興味深かった。フォルクス・ワーゲン社が大学に寄贈した瀟洒な外国人研究者用住宅が郊外の丘にあり、そこでスペイン、イタリア、ギリシャなどの研究者とも親しくなった。最も親しくなったのは、主人がスペインの生化学者で、夫人はドイツの小児科医の家族であり、旅行に出かける時はお互いに子どもを預けて出かけるようになった。(欧米では、幼い子どもを旅行やレストランに連れて行くのを避ける傾向が強いので、子どもを預けたり、ベビーシッターを雇うことが多い。大学生のアルバイトとしてベビーシッターは主要な職種となっている。)

そこで経験した驚きは、今でも鮮明によみがえってくる。預かった娘は9~10か月の離乳期であったので、食餌をどうするか、母親に相談すると、離乳食の瓶詰ベビーフードを持ってきて、「1日3回、1瓶ずつこれを食べさせて下さい」と言われた。当時の日本では(今でもその傾向は残されているが)離乳食は手作りで母親の味を、というのが主流であった。果たして3食、同じ瓶詰の離乳食を食べてくれるか、心配であったが、翌日実際に与えてみると3食、ニコニコ喜んで食べてくれるので驚い

た。

このことは色々なことを考えさせられるきっかけとなった。離乳食の与え方と味覚の発達の間を考えると、ベビーフードによる離乳食がワンパターン化すると味覚の発達に影響するのではないか、という可能性である。ドイツの日常生活で印象深かったことの1つは、食餌が比較的ワンパターンである点であった。この印象を持ったのは私を含めた日本人留学生だけでなく、イタリア人やスペイン人医師等とパーティで一緒になると同じような感想を語りあったものである。小児科病棟では、昼食を同僚と一緒に摂ることも多かったが、いつも似たようなメニューが出された。さすがにドイツ人医師も、ときには不味そうに「健康のために!」と食べても食べてもなかった。このような食生活では、食費はあまりかからないので、生活費を車や住居に十分使うことが出来るのかも知れない。実際、この二つはドイツ人のステータス・シンボルとなっているように感じられた。

このように楽しい興味ある生活を経験したマールブルグを先年、31年ぶりに再訪した。城や聖エリザベート教会、ラーン川畔の菩提樹並木道などの変らない景色を懐かしく眺めた後、小児科を訪れた。受付で聞くと知人は誰も残って居らず、唯一人、一緒に染色体研究をした女医が郊外に住んでいることを知らされた。電話をすると早速ホテルに来られ、久しぶりの再会を果たした。翌日は自宅での昼食に招待され、大変ご馳走になった。その折に、ジャムを掬うスプーンの首が瓶頸にかけるようにU字型に曲がっているのを珍らしたところ、帰り際にワインと一緒にそのスプーンを記念に渡された。ドイツではワイングラスに容量が刻んであるが、このスプーンもドイツ人の合理主義的な面を表しているようである。マールブルグの思い出を掬うものとして今も愛用している。

(家政学部教授)



マールブルグの市場広場



## ≡ 図書館からのお知らせ ≡

### ★ 図書館利用者アンケートについて

附属図書館では平成13年の11月から12月にかけて、学生・教職員を対象にした利用者アンケート調査を実施しました。このアンケート調査は利用者が図書館をどのように評価しているのかを把握し、サービス向上に活用していくことを主な目的として行われました。

アンケートには全学生の約36%にあたる、953名の学生から回答がありました。

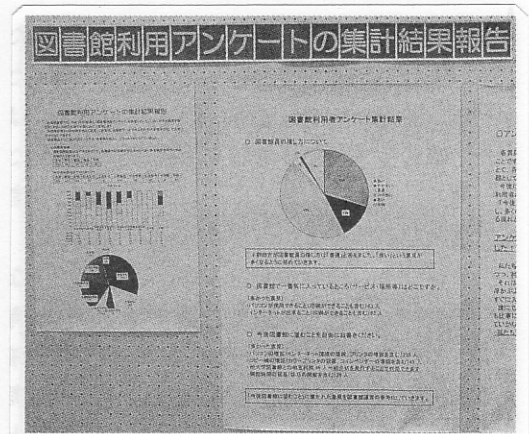
調査結果は昨年1年間図書館1階カウンター前で展示しました。展示内容を各テーマごとに取りまとめで、隔月に1度更新するかたちで行いました。

調査結果を見ると記述式の質問に対しても多くの回答が寄せられ、利用者のみなさんがより一層のサービス向上を強く期待していることがうかがえました。

アンケート結果をもとに、図書館では下記のことを実施しました。

- 図書館ホームページの宣伝をより一層充実させました。
- 要望の多かったジャンルの図書・雑誌を増やしました。
- OPACの利用方法をわかり易く説明した、リーフレットを作成しました。
- 館内施設の利用方法についての案内を充実させました。

アンケート調査は定期的を実施することで、より正確な評価が得られます。今後も定期的にアンケート調査を実施して行く予定です。今後も利用者のみなさんのご要望・ご期待に沿えるよう、より良い図書館作りを目指して館員一同努力して行く所存です。



### ★ 図書館の情報コンセント設置について

社会の情報化が進みインターネットはもはや情報収集には欠かせないものとなりました。

町田キャンパスにはラウンジや食堂に情報コンセントがあり利用者が自分のパソコンを持ち込んでインターネットやレポート作成ができるようになっていますが、このたび図書館内でもパソコンの利用ができるように情報コンセントを設置しました。図書館1階閲覧席とグループスタディールーム等の各部屋と2階の一部で利用できます。

## 本学教員寄贈著書紹介

平成14年に寄贈を受けた本学教員の著書等を紹介します。ご寄贈いただきましてありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご惠贈いただければ幸いです。

飯久保 薫枝 (人文学部)		歴史的研究*	2002
国際化時代の子育て	教育出版センター	四十院成子 (生活科学科)	
思老教育の基本と課題	群書	ライフステージの栄養学実習	ドメス出版 2001
上村 協子 (家政学部)		中村アツコ (家政学部)	
大都市サラリーマンの老後の経済生活に関する調査研究報告書	住友生命総合研究所	物質・生命・環境	宣協社 2002
財産・共同性・ジェンダー	東京女性財団	自然と生活環境	宣協社 2002
生活の経営	放送大学教育振興会	西海 賢二 (人文学部)	
生活と経営	産能大学	地方史研究ほか論文多数	
江原 絢子 (家政学部)		森島 勇 (家政学部)	
近現代の食文化	弘学出版	二十世紀の建築	白水社 2002
大橋 竜太 (家政学部)		岩見 哲夫 (家政学部)	
大里地区 伝統的建造物群保存対策調査報告書	八丈町教育委員会	単一種より構成されるインドストムス目(硬骨魚綱)魚類の系統分類学的研究*	2002
佐藤 広美 (家政学部)		(敬称略 順不同 * 印は科学研究費補助金研究成果報告書です)	
20世紀における日本の近代化と教育改革に関する			

## 一日々の案内人

森 宏 枝

小学校に入ったとき漢字の読み方を聞いた私に、17才年の離れた長兄が辞書の引き方を教えてくれた。これをきっかけに、読み聞かされていた本を全く逆の立場で読むようになった喜びの気持ちは今も忘れられない。

大学では、教師を志すものはこういった本は読めとの言い伝え(?)が耳に入る時代であった。その一冊 阿部次郎の「合本 三太郎の日記」は、その後の私の生き方に少なからず影響を及ぼした。書名の通り、29才から35才にかけて書かれた著者の内面生活の記録である。

かなり難解な部分もあるが、得手勝手な想いを巡らせて読んだ。瀬川菊之丞なる人物から青田三太郎への転身による心の解放、その後の自己確立に至る魂の彷徨、空と山と野と海と、人の心の奥に流れる生命にふれて、一瞬の生を共にする心に大きな感銘を覚えた。私は食に関してこんな話をする。「鶏にとって子孫を残すことは、自然界の定めである。その為、卵には胚がヒヨコになるまでの完全な栄養と、物理的、化学的な何重もの胚の保護作用がある。それを私達は、横取りをして食材に医薬品に利用している。それ故、自然に対する感謝と畏れ、謙虚な気持ちを持ってはならない」と。これは、「山上の思索」

の章にみる命溢れる自然と自分との同一心に通ずると感じている。現代の学生も「蝦と蟹」「日常些事」などの章を、手始めに読んでみては如何だろうか。

職を辞した後の生活は、心のおもむくままにと考えている。心のおもむくまとは? 丁度この時期に、いとこ達の「こどもたち こどもたち1948年・1954年の絵日記」(絵日記: もりよしこ/もりひでぶみ、文: 鶴見俊輔、詩: 谷川俊太郎)が出版された。既に還暦を過ぎたいとこ達の小学校1・2年の絵日記を読み、日常のこと総てに、生きていることを楽しむ子どもの心、この心のままに生きようと思っている。谷川俊太郎の詩「ぼくら」の「じぶんをめいしにとじこめる」のではなく、「おおきくなる」の「おおきくなるのは ころろがちちんでゆくことですか/おおきくなるのは みちがせまくなることですか」ではない心の持ち方で。

敗戦を韓国で迎え、引き揚げ時に多少日常的でない経験をした私の生きる課題、極限状態に置かれた時に自分のとる態度は、多くの本と友人達に導かれ答がでると考えている。

(家政学部教授)

## 大江文庫について

貴重資料の「画像データベース」を夫々の機関のホームページ上で公開するところが増え、パソコンの前に座ればいつでも・何処からでも資料に触れる機会が得られるようになったことは嬉しい限りです。

本学の貴重資料「大江文庫」についても「画像データベース」の声が上がっています。ただ実現にはもう少し時間が必要です。

平成一四年三月、長い間大江文庫に携わってこられた廣澤幸子前図書館事務部長が定年退職されました。退職までの数年は目録の整備に全力を尽くされ、改訂増補大江文庫目録 江戸時代編もあと少しを残すところまで進められました。貴重資料の電子化は、基本になるデータ整備は勿論の事、画像データベースとなれば、予算および労力を十分に勘案して計画を立てねばなりません。

貴重資料の保存と利用は、図書館にとっての課題です。

現在、江戸期の資料を納めている貴重書庫の整備を、若い関司書が中心に行っています。また虫喰劣化など痛みの酷い資料の補修を、

少しずつ行なっています。

平成一四年度に大江文庫の電算入力促進を掲げ、カードファイルされていなかった創立五〇周年記念の目録掲載の資料と、それ以降に増加した資料を現在、野口情報係長と関司書が入力作業をしています。平成一五年三月には、「料理」「衣」の部が終わり、四月から取り敢えず書名からの検索が出来るように進めています。

大江文庫は現在も増加しており「料理」や「衣」等分野ごとの最新の所蔵状況や、先々は目録全文から多様な検索が出来るよう努力していきます。

また大江文庫資料を使った学生の卒業研究のなかには江戸期の料理を再現したものがあり、当該料理本と再現した料理の写真をリンクさせ古い時代を新しい時代のかに息づかせ身近にわかり易い資料として感じて頂けるよう工夫を重ねていきたいと考えています。専門の研究者の方々のご指導や利用者の声を頂き「大江文庫」を守り育てて次代に繋げる気持ちでおります。

情報管理課長 関原暁子